

令和4年度

帝塚山学院泉ヶ丘中学校
入学者選抜試験問題

1次A入試

国語

(試験時間 60分)

受験番号	
------	--

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「お父さんから大事な話があるの。下りておいで。おそばもそろそろ茹であがるから」

二階に下りると、祖父母と父がこたつに入り、兄はソファに座ってテレビを見ていた。

母が食卓に座っていたので、その隣に優花は座る。

おう、優花、と兄がビールを軽く掲げた。

「お前も軽く飲むか？」

母が「優花にはまだ早いから」と兄をたしなめた。

「ちよつとぐらい、いいやろう？ お母さんは頭が固いな、まあ、いいや。でも優花、なんだ？ お前、飲んでもないのに顔が赤いぞ」

「えっ、うん、そうかな」

手のひらをうちわのようにして、ひらひらとあおぐと、三階からコーシローの吠える声が聞こえてきた。

兄が舌打ちをした。

「うるせえな。いつまで預かるんだよ」

「三日まで。ごめん、やつぱ上にいる。コーシロー、一人で寂しがつてるんだと思う」

いや、優花、と父が声をかけた。

「進路の話をしよう。忙しくて話ができんかったが、三者面談のことはお母さんから聞いたから。犬、二階に連れてくるか。たしかに寂しそうな声や」

京都でパン職人の修業をした父は、くつろいでいると、どこものとも言えないやわらかな方言になる。

祖父は「頼りない」と言っつて、その話し方を嫌うが、今日は黙ったままだ。

父が三階を見上げて、祖父母に声をかけた。

「 (1) 」

祖父が無言で首を横に振り、祖母がはっきりと顔をしかめている。

「 () 2 」
「 () 3 」

気をつけているのだが、やはり臭うのだろうか。

母が牛乳をコーシロー用の器うつわに入れた。

「 () 4 」

器を持った母が三階に上がっていった。

「 () 5 」

昨日、母に渡した模試の結果を、父がこたつの上に出だしている。

今回の模試から国立大学の志望校のランクを上げ、戦前からの歴史がある名門校を入れた。その大学の合格判定はB。前からの志望大学はすべてA判定。一学部だけ志望校に入れている東京の難関私大の結果もB判定だ。

父が祖父に模試の結果を渡した。

「ほらお祖父ちゃん、ここ。ABCDEの五段階だよ。優花は前まではBやCばかりやったのに、ほとんどAとB。早稲田もB判定になってる。前はDだったのに」

「私、もしかして早稲田も受かるかも。文系三教科だけなら、結構いい線いくんだ」

「見ても、さっぱりわからん」

① 祖父が模試の判定表をこたつに放り投なげた。

「早稲田？ 男ならともかく、女の子が東京の私立に行つてどうするんだ」

「別に私、行くなんて言つてないやん。でも……受けるだけ受けてみてもいい？ 記念に」

「行きもしない大学を受けてどうするんだ」

「どこまでやれるのか見たいっていうか。わかってるよ、お祖父ちゃん。家から通えるところしか行けないって」

模試の結果に優花は目を落とす。

「でもさ、普通、孫の成績が上がったら、ほめてくれたって……」

「お前は人にほめられたくて勉強してるのか」

「そうじゃないけど」

「お祖父ちゃん、優花にそんなにつらく当たらんでも。お父さんは立派やと思ってるぞ、優花のこと。鼻が高い。お祖父ちゃん、ほら飲んで」

徳利を持ち上げ、父が祖父の杯に酒を注いだ。勢いあまってこぼれた酒を祖父が口から迎えにいき、チュツとすすった。

「ああ、しみる……。いいか、優花。ちよつとばかし勉強ができるからって、^① テングになつたらいいかんぞ」

父さん、と言ったあと、父が「お祖父ちゃん」と言い直した。

「優花はテングになんてなつてへん」

「なつたらいいかんつて注意しとるだけだ」

祖父がうまそうに酒を飲むと、口元をぬぐった。

^② 「いいか、世の中には学校の勉強なんかより、もっと大事なモンがある。お兄ちゃんを見てみる。中学、高校と荒れてたけど、今じゃこの家の長男としてすっかりうちの商売を支えてる。勇、ほら、お前も一杯飲め」

「俺、^③ 2 ポン酒よりビールのほうがいいんだけど。まあいいか」

兄が祖父の隣に座り、酒を飲み始めた。

祖父、父、兄の男三人が並んで飲む姿を嬉しそうに眺めていた祖母が、みかんをむき始めた。

「ほら、優花はおみかん食べな。肌がきれいになるから」

食べたくはないが、祖母がむいてくれたみかんを黙って口にする。奥歯で噛みしめるようにして食べると、冷たい汁が口のなかに広がっていった。

おいしいやろ、と祖母が言い、優しく目を細めた。

「東京でしよぼしよぼ一人でご飯を食べるより、一家そろってみんなで食べたほうがうまいに決まってる」

そりやそうだ、と祖父がうなずいた。

「何はなくとも家が一番。みんなで食べればなんだったうまい」

三階からコーシローの吠え声が聞こえた。母が「静かに、静かにね」となだめている。

^③ 階下を必死で気遣うその声に、怒りがこみあげてきた。

「そうかな？」

みかんの薄皮を口から出し、優花はティッシュにくるむ。

「みんなで食べるとおいしいって思ってるの、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんだけだったりして。そりゃ楽しいよね。いつもご飯食べながら、私やお母さんに言いたい放題言ってる」

④ 祖母がため息をついて、首を横に振った。

「おお、こわ。誰に似たのか、角が立つことを言う」

「どうしてお祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、お兄ちゃんばかりほめて、私には嫌みを言うの？」

「こらこら、優花、お祖母ちゃんも」

祖母が何か言おうとしたのを父が制した。

「カツカしない、大晦日だから。楽しくやろうや。優花が角が立つこと言うだつて？ 誰に似たかつて、それは明らかにお祖母ちゃん似だ。みんな黙ってや。お父さんは優花と進路の話をするんやから」

「お父さん、俺、その話の前に優花に言いたいことがある。お兄ちゃんばかりほめてつて、優花、お前はほめられるようなこと何かしたか？ 自分で稼いだこともなくせに記念受験だなんて、金遣うことばかり言つて」

「そんな言い方ないでしょう。お兄ちゃんだつて高校生のときは稼いでなかったやん！」

おつ、オリンピックの選手が出ると、と祖父がテレビのボリウムを上げた。

今年を振り返る映像のなかに、^⑤3 ソウルオリンピックで活躍した日本選手が映っている。

「高校球児もそうだが、スポーツ選手つてのは実に清々しい。見る、優花。額に汗して励んだ奴らは、みーんない顔しとる」
「お祖父ちゃんは、どうしてスポーツ選手はほめるのに、勉強に励んでる孫には嫌みを言うの？ 勉強を頑張る子もスポーツを頑張る子も一緒じゃない」

兄が日本酒をあおると、杯をソファテーブルに打ちつけた。

「可愛くねえな。いいか、優花、教えといてやるよ。社会に出れば勉強ができるのと頭がいいつてのはまったく別モンだからな。納品先にもおるわ。いい大学出てても、まったく使えねー奴」

「その人、単にお兄ちゃんとそりが合わないだけなんじゃない？ それに言うほど私、賢くないですから。うちのレベルが

低いだけ」

⑤ 祖父の^④猪口に酒をついでいた父が手を止めた。

「そうやな、と父が寂しそうに笑った。」

「お父さんは中卒やし。お祖父ちゃんも小学校しか出とらん。鷹が鷹を生んだようなもので、優花の気持ちはなかなか理解してやれんかもしれん……」

「違う、そんなつもりで言ったわけじゃ……」

⑥ テレビの音がやけに大きな音で響く。父がリモコンを手に取り、テレビを消した。

階段を下りてくる足音がして、母がリビングに入ってきた。

「どうしたの、静かになって。テレビは？」

祖母が二つ目のみかんを手荒くむきだした。爪が引っかけたのか、わずかにしぶきが上がっている。

「いやね、と祖母が口をとがらせた。」

「優花がどうしても東京に行くって言うから」

「そんなこと言っていない！」

⑦ あなた、と母が非難するような目で父を見た。

「きちんと話してくれるって言ったのに」

「そうなんだよ、優花」

父がこたつのわきから封筒を出した。

「お父さんは東京の大学を受けるのは賛成や。その話をしたくて呼んだのに、みんなが^⑤茶々入れるから」

えっ、と声をもらして、優花は父の顔を見る。

父が封筒から「受験生の宿」と書かれているパンフレットを出した。

「お母さんに詳しく話を聞いてな。優花のその、希望学部、そいつの試験日も調べて、昨日、受験生用のホテルも取ってきた」

交通公社のロゴが入った封筒を開けると、新宿のホテルの予約票が入っていた。

「お父さんからのお年玉や。新幹線の回数券も入れといたぞ」

「なんで回数券……」

「受かったら部屋探しか、しなくちやならんやろ。だめならお母さんと東京デイズニールランドに行けばいい。無駄にはならんよ」

兄が鼻を鳴らすと立ち上がった。

「なんだよ、昔つからお父さんは優花に甘い！」

「勇には車を買ってやった。優花は車の代わりに大学へ行くんや。この話はこれでおしまい。みんな、優花がくじけるようなこと言うな」

⑧ 父からもらった封筒を両手で持つと、涙がこぼれ落ちた。

「お父さん、ありがとう……ありがとう」

「泣かんでいい、ほら、テレビまた見るか」

リモコンを取り、父がテレビの電源をつけた。祖父はごろりと横になり、祖母は不機嫌そうにみかんを食べている。

紅白歌合戦は終わり、「ゆく年くる年」が始まっていた。

(伊吹有喜『犬がいた季節』)

⑨ 1 テングになったらいかんぞ……「いい気になってはいけない」という意味。

⑨ 2 ポン酒……日本酒のこと。

⑨ 3 ソウルオリンピック……1988年に開催された。

⑨ 4 猪口……日本酒を飲むための小型の器。

⑨ 5 茶々入れる……「茶々を入れる」とも言う。人の話の途中に余計な口をはさむこと。

ウ 祖父や祖母の心配を気にもかけず家族に対する思いやりもない優花に対し、残念だと落ち込む気持ち。

エ 祖父や祖母の言うことを聞こうとせず手厳しい反論までする優花に対し、あきれかえる気持ち。

(六) — ⑤ 「祖父の猪口に酒をついでいた父が手を止めた」とあるが、この時の父の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 勉強の得意な優花が、家族から離れ、よりレベルの高い世界に行きたいと思っていることが透けて見え、置いていかれる気がして、悲しく残念に思う気持ち。

イ 勉強の得意な優花の気持ちを理解したいが、自分たちは受験のための勉強をしておらず、優花の気持ちを十分に理解できず、悲しく申し訳なく思う気持ち。

ウ 優花が家族の中でただ一人頭が良いために、家族と優花の会話のレベルが異なり、誰も優花とうまく意思疎通が出来ないので、悲しく申し訳なく思う気持ち。

エ 優花は家族の中で一人だけ勉強が得意だが、そのせいで時々優花が家族の学歴の低さを見下すような発言をすることがあるので、悲しく残念に思う気持ち。

(七) — ⑥ 「テレビの音がやけに大きな音で響く」とあるが、この描写から読み取れる様子として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 家族の全員がそれぞれの意見を譲らず、心の中で互いが互いを非難するようなとげとげしさに満ちた様子。

イ 優花が家族の学歴を否定する発言をしたため、学歴に強いこだわりを持っている家族がショックを受ける様子。

ウ 優花の進学をめくり家族の中で言い合いやすれ違いが起こり、気まずい沈黙の中に家族が包まれている様子。

エ 優花が父の学歴を否定するような発言を思わずしてしまったため、優花が周囲の反応に敏感になっている様子。

(四) — ⑦ 「あなた、と母が非難するような目で父を見た」とあるが、この時の母の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父が優花を呼んだのは、東京の大学の受験に賛成だということを伝えるためだったが、父が祖父や祖母の意見に押されて優花の受験に反対しそうになっていたので、父に当初の予定通り受験に賛成するよう責める気持ち。

イ 父が優花を呼んだのは、東京の大学の受験に賛成だということを伝えるためだったが、父が優柔不断で再び迷っているうちに、祖母と優花のけんかが始まってしまったので、父に早く決断するよう責める気持ち。

ウ 父が優花を呼んだのは、東京の大学の受験に賛成だということを伝えるためだったが、父は自分ではすでにそれを伝えたくもりになっている一方、優花や家族には全然伝わっていないため、もう一度きちんと伝えるよう責める気持ち。

エ 父が優花を呼んだのは、東京の大学の受験に賛成だということを伝えるためだったが、父がまだそれを言い出していないことが祖母と優花の口論の様子から分かったので、父に早く言い出すよう責める気持ち。

(四) — ⑧ 「父からもらった封筒を両手で持つと、涙がこぼれ落ちた」とあるが、この時の優花の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 東京の大学の受験に反対され辛かったが、父は認めてくれていたことを知り、さらにその準備までしてもらい、念願の受験ができるようになり嬉しかった。

イ 東京の大学の受験を反対され辛かったが、父だけが認めてくれて嬉しい一方、自分だけ特別扱いされたことへの罪悪感もあり複雑な気持ちになった。

ウ 東京の大学の受験を反対され辛かったが、父の決断で、今まで言い負かされるばかりだった自分の意見が通ったと思ひ、勝ち誇るような気持ちになった。

エ 東京の大学の受験を反対され辛かったが、今までの家族の厳しい態度は、優花を驚かせてより一層喜ばせるためだったとわかり、家族の優しさに感動した。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日本語を学び、それを日本で使う外国人は、増えています。

日本語を流暢りゅうちやうに使う外国人を身近に知っている人も読者のなかには多いでしょうし、テレビでそういう人たちを見たことがある人なら、もっと多いことでしょう。

(1) 日本語という外国語を話す人びとに対して、私たち日本人は、実はかなり厳しいのです。言い換えれば、日本人は、外国人が使う日本語を認めるハードルが、意外に高いのです。

この①母語への許容度について、(2) 日本とアメリカとを比べてみましょう。
アメリカは、基本的に②1移民が作った国です。

つまり、ほとんどのアメリカ人の祖先は、外国人としてアメリカに came し、アメリカは今でも移民を受け入れています。ですから、アメリカ人やアメリカの③2コミュニティは、外国語として英語を使う人の存在、(3) その人たちが話すたどたどしい英語や訛りなまのある英語に慣れっこです。④3スタンダードな米語の響きひびに親しんだ私たちの耳には奇妙きみょうに聞こえる多様な英語が、アメリカでは今現在も共存していますし、人びとはそれを当然のものとして受け入れています。

ところが、日本ではどうでしょうか。

初対面で日本語を話す外国人に対しては、まだカタコトであっても、

「日本語が上手じょうずですねえ！」

と賞賛する人が少なくありません。

けれども、それは、相手を「⑤2お客さん」とみなしているうちのことです。

実際にその人と毎日のように接し、仕事や生活の上でやりとりをするようになると、評価は変わります。

たとえば彼らかれらが⑥4助詞の「に」「で」の使い方を混同したり、聞き取りにくい発音をしたりすると、内容よりもそちらの間違まちがいに気をとられてしまい、思ったより日本語が下手ただ、たいしたことはない、と考えがちです。

それには、理由があります。私たちはアメリカ人のように、日々の暮らして「変な母語」に囲まれていないから、ひどく気になるのです。

私たちはずっと、

・日本人は日本にいて日本語を話す

・外国人は外国にいて日本語を話さない

という前提で生活してきました。

しかし、日本に来る外国人の数はどんどん増え、その中で日本語を使う人の数も増えてきています。

言い換えれば、当の日本人よりも先に、日本語という言語が国境を越えて用いられるようになり、「国際化」してしまったのです。

外国人のなかには、日本人の日本語と区別できないほど、上手な日本語を使う人もいます。しかし、多くの人たちは、アクセントがおかしかったり、単語の組み合わせが妙だったり、助詞を間違えていたりします。

それを全部「あの人の日本語は正しくない」「あの日本語じゃダメだ」という枠に押し込め、肝心の話す内容をきちんと評価しないでいたら、どうでしょうか。③ 外国人と私たちの、日本語によるコミュニケーションは、いつまでも成り立ちません。数字の0と1の間には、無数の数が存在します。

同じように「正しい日本語」と「正しくない日本語」の間にも、さまざまなバリエーションが存在します。

発音が下手だから外国人の日本語はダメ、という画一的な見方でなく、時に間違いを善意で指摘しながらも、話はきちんと聞き、その中身や内容を評価して誠実に応えることが、これからの日本人には求められるでしょう。

その評価のためのキーワードは、「共感」です。

この共感とは、母語であるか否かにかかわらず、コミュニケーションの方法として日本語ということばを選びとった他者の気持ち、自分のもののように感じとるような心のありようです。

私たちは、自分の周囲は日本人がいる日本であり、何か境界を隔てた外に外国人がいる外国がある、という単純な世界観でものごとをとらえがちです。その境界の一つが、日本語ということばです。日本人は日本語を使うからウチの人、外国人は違うことばを使うからソトの人、というこの心理的な境界は、日々の生活の大前提といってよいほどでした。

しかしいまは、たとえば国際アニメフェアで、スウェーデン人と韓国人が互いの共通語として日本語を用いているような状況は、ごく普通です。このような場合、日本語ということばは私たち日本人とかかわりなく、国際的な共有物として機能

しています。④ 日本語はもはや私たち日本人だけのものではないのです。戸惑うことですが、多くの外国人が用いる外国語という側面も持つようになっていっているのです。

外国人が使う日本語は、私たちの基準からすると美しくはないし、認めがたいものかもしれませんが、それでも、それをこの世界で日本語ということばが外国語として使われているのだ、私たちの母語を使ってくれているのだ、と日本語が地球規模で育っていく過程を認めていく度量（＝共感）を持つことで、私たちは世界観を変えることができます。⑤ 心の境界線を飛び越えて、もっとおおらかに世界を見つめられます。

「日本語という外国語」の知識、そしてそれを学ぶ学習者への共感、日本語教師になるためだけに必要なものではありません。私たちが国際化した母語を見直し、外国人との新しいコミュニケーションのかたちを作っていくための、大切な資産となり、構えとなるものなのです。

(荒川洋平『日本語という外国語』)

① 移民……労働を目的として外国に移り住んだ人。

② コミュニティ……まとまりのある人々の集団。

③ スタンダードな米語……アメリカで標準的とされる英語。

④ 助詞……文中にある「に」や「で」のように、ことばとことばとの関係をしめす言葉。

(一) (1) (3) に入ることばとして最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じ記号を二度使わないこと)

ア ところが イ そして ウ つまり エ たとえば

(二) ① 「母語への許容度」とあるが、「母語」とは、その人が幼い時から身につけ、使用している言語である。アメリカ人と日本人の「母語への許容度」について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア アメリカ人は移民が多くなる日々の生活で訛りのある英語に慣れていないため、外国人の使う英語も自然と受け入れられるのに対し、日本人は外国人が使うような訛りのある日本語に慣れていないため否定的に受け止めてしまう。

イ アメリカ人は移民が多い環境で生活しているため訛りのある英語に敏感であるのに対し、日本人は日本語を話そうとする外国人が増えてきたためカタコトの日本語に対して好意的に受け入れている。

ウ アメリカ人は常に訛りのある英語に囲まれて生活しているため文法が誤っていても理解出来るのに対し、日本人は少しでも文法が間違っていると気になるために外国人の誤った文法の日本語を理解しようとしにくい。

エ アメリカ人は外国人の使う英語に奇妙さを感じてはいるが、日常的に移民の英語に慣れているので受け入れやすいのに対し、日本人は外国人の使う日本語の不自然さが気になるものにあえて指摘せずに理解しようとしている。

(三) ② 「お客さん」とあるが、ここではどのような人を指すか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分とは仕事で関わる、母語でない外国語を話している人。

イ 自分とは初対面で、母語として日本語を話している人。

ウ 自分とは付き合いが浅く、母語でない日本語を話している人。

エ 自分とは日常的な付き合いがあり、母語として外国語を話す人。

(四) ③ 「外国人と私たちの、日本語によるコミュニケーションは、いつまでも成り立ちません」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本人は外国人の話す日本語に誤りがあると、表現や発音に注意が向いてその内容をきちんと理解しようとしなくなるから。

イ 日本人は外国人の話す日本語をきちんと聞き取ることができないため、理解しようと思っても正しく理解することができないから。

ウ 日本人は外国人の話す日本語の文法の誤りを指摘せずにはいられないため、いつまでたっても内容についての話にならないから。

エ 日本人は外国人の話す日本語を評価することに夢中になって、こちらから意見を伝えることがおろそかになってしまいうから。

④ 「日本語はもはや私たち日本人だけのものではないのです」とあるが、それは具体的に言うとうどういうことか。その例として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア アメリカ人の学生が、先生の母語である英語で日本語を教わる。

イ もとはポルトガル語である「タバコ」という言葉が日本語になっている。

ウ 韓国旅行中に、日本人が韓国語を積極的に使って現地の人と会話する。

エ スペイン人と中国人とで一緒にカラオケに行き、日本の歌を日本語で歌う。

⑤ 「心の境界線」について説明した次の文の [] に入る適当なことばを、本文中から四十字以内で探し、最後の五字を抜き出して答えなさい。(ただし、句読点は一字とする)

(四十字以内) [] と考えて、ことばをもとに自分たちとそれ以外の人たちとを分けるもの。

(七) この文章には「これからの日本語コミュニケーションのかたち」という副題がついている。「これからの日本語コミュニケーション」のために筆者は何が必要だと考えているか。それを説明した次の一文の [] に当てはまることばを、本文中のことばを用いて五十文字以内で書きなさい。

コミュニケーションの方法として [] (五十文字以内) をもつことが必要だと考えている。

三 次の(1)～(10)の——をつけたカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) カクギ決定について新聞の記事で読む。
- (2) 正義が勝つツウカイな物語を読む。
- (3) スイリ小説に夢中になる。
- (4) すぐに意見を変えるなんてセツソウがない。
- (5) 災害後すぐにフツコウ作業が始まった。
- (6) 橋の上からシオの流れを見る。
- (7) 洗濯をしたらセーターがチヂんだ。
- (8) 彼が今日の学級会の司会をツトめる。
- (9) 心がくじけそうな時こそ勇気をフルい起こそう。
- (10) ここは作物がよく育つユタかな土地である。

四 次の(1)～(5)のA B二人の会話を読んで、□に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ後のア～オから選び、記号で答えなさい。

- (1) A 「昨日、居残りでたっぷり勉強させられてそれだけでもへこんでたのに、帰る途中から雨が降ってきちゃってずぶぬれになっちゃったよ」

B 「それは□だったね」

- ア 蛙かえるの面つらに小便 イ 泣なき面はらに蜂 ウ 転かえばぬ先の杖 エ 良薬は口に苦し オ 寝耳ねみみに水

- (2) A 「小林先生に呼ばれて行って見たらさ、次の試合、おまえレギュラーだからなって言われちゃったよ」
B 「よかったじゃないか。一年生でレギュラーなんてすごいじゃないか」

A 「よかないよ。これで先輩たちからねたまれちゃうよ」

B 「そうか。[] ってやつだね。でも、せっかくのチャンスなんだからさ、がんばれよ」

ア 口火を切る イ たてを突く ウ 背に腹はかえられない エ 頭が上がらない オ 出る杭は打たれる

(3) A 「聞いてよ、花子ったら太郎君に告白してオッケーもらったって。ひどいよ、わたしが太郎君とつきあってるの知ってたのに」

B 「うん、聞いた。あんたと太郎君を見てるうちに自分も太郎君を好きになったんだって。[] なんて言ってたよ。」

ひどいねえ」

ア 隣の花は赤い イ 岡目八目 ウ なさけは人のためならず エ 花より団子 オ 下手の横好き

(4) A 「おれは名前も知らされぬ作戦に参加させられ死の淵を見た」

B 「あんた何言ってるの？ ただ教室の掃除当番でゴミ捨ててきただけじゃない」

A 「おまえらしい [] もの言いだな。おれのちっちゃいハートは傷ついちゃったんだからな」

ア お茶を濁す イ 歯に衣着せない ウ 一筋縄ではいかない エ 目先が利く オ さじを投げる

(5) A 「おい、やっとクラブ棟が建て替えられるんだってよ」

B 「ああ、聞いたよ。学校もようやく [] を上げたらしいね。老朽化が進んでたし」

A 「それにしても長かったよなあ。新しいクラブ棟ができるころにはおれたちも引退だけど、一年の時から署名集めた

甲斐があったってものだ」

ア 白羽の矢 イ ぬかに釘 ウ 浮き足 エ 重い腰 オ あとの祭り

【五】

次の文章中の(1)～(5)の——を引いたことばと同じ種類のものを、後のア～オの——を引いたことばから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じ記号を二度使わないこと)

日本には様々な(1)文化があります。たとえば、春にはお花見という文化があります。(2)大きい桜の木の下に(3)座り、大人も子どもも飲み食いして楽しめます。ふだんは(4)まじめな人も、この日ばかりははめを外してさわぎます。お花見は日本人にとつて、(5)とても楽しみな行事なのです。

ア 国語力を上げたければ、本をたくさん読もう。

イ あなたをチームリーダーに任命します。

ウ ヨーロッパの街並みはすぐきれいだ。

エ お兄ちゃんなんだから、しっかりしないと。

オ その知らせに私はだんだんうれしくなった。

